

「健康の科学」 1 (2)

チャールズ・キングズリー著
福田 泰久訳

しかし、それだけでは済まない。健康の状態を教えた後は、病気の状態も教えなければならない。特に、人工的な生活様式にさらされた町の人々の健康を著しく損ねる傾向のある病気について教えなければならない。若い男女には、酵素病、瘰癧（るいれき）、肺結核、佝僂（くる病）、糖尿病、脳の錯乱などの原因を教えるべきである。また彼（女）らには、きれいな空気、澄んだ水、混じりけのない食べ物、気持ちよく乾燥した住居などの実際的な価値を示すべきである。男性であれ女性であれ、日々自分の命や子供の命がかかっている排水の諸問題について健全な考え方を身につけ隣人の役に立つことで、安寧と幸福を感じない者がいるだろうか。男女とも安寧と幸福を感じるだろう（女性がと言いたいところではあるが）。というのも、家庭を取り仕切り、子どもを育てるのは女性であり、男性が留守にしている間、家にいるのは女性だからである。

「これらのテーマを公開講座で若い女性に教えることはできない」と言う人がいれば、私はこう返答する。もちろん、これらのテーマは女性（しかも十分な教育と法的な資格を持つ女性）によって教わるものでなければならない。すべての女性たちが知っておくべきことを、そして女性たちの親が男性から話を聞かされることに反対していることを、女性たちに教えよう。これが、私が過去 20 年に渡って医療従事者として女性を訓練すべきだと主張してきた主な理由の一つである。当初の着想段階では、この計画（すなわち、中世において女性が担い、16 世紀には不当に追い出されてしまった神聖なる要職である治癒者という女性本来の役割を取り戻す計画）はあまりに途方もないため、心に抱くことさえできなかったものだった。だが今では（神に感謝しよう）筆者の計画は次第に英国の、そしてすべての文明国の常識となり

つつある。

例えば、筆者が読者に熱心に勧めている国民健康協会（National Health Society）²による「チェザー女史³による初歩的な生理学と衛生に関する女性のための講義コース」の告知を目にするのは非常に喜ばしいことであるし、ガヴァネスが半額で入場できることもまた喜ばしいことである。もし30年前にガヴァネスがこうしたことを教わっていたら、どれほどの不幸や病、さらには死を防ぐことができたであろうか。このような分野の講義を富裕層と貧困層の両方に行うことのできる教養ある女性たちが、近い将来に現れんことを（というのも、妙な話ではあるが、貧困層同様、富裕層もそうした講義を必要としているのだ）。また、すべての大きな町で男女双方向けの健康教室が開かれ、汚物やアルコール、病気や死との戦いの闘士として、自分自身や家族の面倒を見るだけでなく、同胞市民に道徳的な影響力を及ぼす多くの若い男女を年々送り出す様を、長生きして目にするのができれば良いのだが。

いわゆる唯物論の先端科学が教育に関する実践的な知恵を教えてくれ、人々に心や魂だけでなく体もあることを気づかせてくれる前に、次のように答える人がいたかもしれない、いや、30年前には確実にいただろう。「私たちはより虚弱で不健康になる可能性があるよあなたは言う。だが仮にそうだとして、それがどうしたというのか？人間を作るのは体ではなく心である。私たちは、自分の子どもたちが愚かな巨人や勇者になることを望んでいるのではなく、摂理や自然法則が彼（女）らを虚弱にさせることを選択するとしても、賢く、有能で、高度な教育を受けることを望んでいるのである。机に向かって本を読みふけることで、脳を少しばかり酷使し、肺を収縮させ、消化機能や視力を低下させてもいい。我々が望んでいるのは知性だ。知性は金を生む。知性が世界を作る。私たちは息子がアスリートになるよりも天才になってほしいと思っている。」なるほど、筆者もそうである。しかし、私が警咳に接したビジネス界の成功者たちにほぼ例外なく見られるような、有能で、我慢強く、健康的な体格に裏打ちされたものでなければ、（ドゥソン&フォッグ、⁴ サンプソン・プラス、⁵ モンタギュー・ティグ⁶を除いて）知性のみではお金を稼ぐことさえできないとしたらどうだろうか？知性が、あるいは現在知性と呼ばれているものが、世界を、あるいはその最も小さな車輪や

歯車の歯を構成していないとしたらどうだろうか？自然法則に従わなかったために、親が天才でもアスリートでもなく、ビザンティン時代のギリシャ人のような広く立った額を持ち、脳の代わりにある種のパン粥で満たされ、狂信と強いアルコールに代わる代わる誘惑される、無能で惨めな人物を育てたとしたらどうだろうか？健全な精神を求めるのであれば、ほとんどの場合、健全な身体を持たなければならない。健全な精神にとって唯一信頼できる器官は、健全な身体である。どちらが原因でどちらが結果なのか、筆者はここで議論するつもりはない。とはいえ、概して虚弱で、発育が悪く、腺病質の人々には類似した脳が見られる。それは働きぶりの心もとない、普遍的なものであれ特殊なものであれ、多かれ少なかれ狂気に陥る可能性を秘めた脳である。それは非常に活動的で、新しく壮大なアイデアを（その苛立ちと自己不満感ゆえに）より早く思いつくことができるかもしれない。それは話術を行動力と勘違いしたり、興奮を熱心さと勘違いしたり、憎悪を力と勘違いしたり、残酷を正義と勘違いしがちになるだろう。それは、男らしい独立心、個性、独創性を失わせ、男性が行動するときには、個人的な弱さを意識して、垣根を越えて駆け寄る羊のように、互いに寄り添い、勇気を出して励まし合い、暴徒や大衆の中で揺れ動くような行動をとるだろう。これらは、歴史を読む限り、帝政ローマ、アレキサンドリア、ビザンチウムにおいて、身体的な退化に続いて生じた知性の弱体化であった。先日もパリで、恐るべき形でこれらが再現されているのを見たばかりではなかったか。

筆者は非難しないし判断もしない。広範な帰納法に基づく筆者の主張する理論は非難も判断も禁じている。なぜならこれらの欠陥は主に身体的なものであり、こうした欠陥を示す人々は主に先祖の罪や無知の犠牲者として憐れむべきであると教えてくれるからだ。だが、同時にその理論は次のようにも教えてくれる。すなわち、教育を受けた人間であることを公言し、それゆえによく知っていなければならないにも拘わらず、これらの物理現象を精神的、健康的、賞賛に値するものとして扱い、さらには墮落した人間の弱さを利用してこれら物理現象を悪化させる人々は、どれほど愛国的、科学的、あるいは神聖な言葉で自分たちのインチキを隠したとしても、最も卑劣で、最も危険な公衆の敵であると。

その一方で、正直で、親切で、賢明で、現実的な男性たちがいる。その多くは気分を損ねたくない人たちで、むしろ、何をすべきかだけでなく、何ができるかを善良な政治家のように見分けることを学んだ彼ら自身の経験と常識を教授願いたいと思う人たちである。また、この問題全体に干渉しない人たちもいる。分析した限りでは、筆者が訴えてきた諸悪が全体として避けられないものであるということ、あるいはそうでなくともほとんど修復できないため、下水のように「かき混ぜればかき混ぜるほど悪臭を放つ」ことがないように、完全に放置するのが最も賢明であるということのようだ。彼らは、諸悪が決して改められることがないと、多くの者の心を不安にさせるのではないかと恐れている。そして、私たちが彼らに住居や仕事、食事や社会的取り決め全般に不満を抱かせるのではないかと、さらにはすべてが無駄になるのではないかと恐れているのだ。

筆者は、礼儀と謙虚さをもってこう答える。筆者は彼（女）らに深く共感を覚えると同時に深く尊敬している。だが、あらゆる階級の人々がすでに不満を抱えているのではないかと、そして、人間にとって、このような断片的で、愚かで、貪欲で、罪深い世界は不満以外の何ものでもないのではないかと。物事がうまくいっていると思っている人は、うまくいくということがどうということなのか、毫も理解していないのではないかと？もし物事がうまくいっていないなら、それがうまくいっていないことを知ることは彼にとって良いこと以外の何ものでもないのではなかろうか？真実や事実が人を傷つけることがあるだろうか？筆者は信じることのできる聖書がある限りそのようには考えない。筆者が自分自身に不満を持っているように、筆者が出会うすべての男性、女性、子どもたちに、各々に不満を持たせたいと思っている。筆者は、彼らの肉体的、知的、道徳的な状態について、彼らの中に神聖な不満を呼び起こしたいと思っている。この不満は、まず向上心を持ち、次にその向上心を部分的にでも達成しようとする自制心、思考、努力の源である。神聖な不満に不満を抱き、高貴な羞恥心を恥じ入ることは、まさにあらゆる美德の萌芽であり、最初の成長なのである。人はまず、少年が学校や校長に不平を言うように他人に所為にし、自分の置かれている状況、つまり自分の周りにあるものに不満を持ち、「ああ、これがあつたら！」「あれがあつたら！」と叫

ぶ。だが、そこに救いはない。その不満は、社会的あるいは政治的な反乱と反逆に終わるだけである。しかも、また、同じような状況に対する崇拜において今度は絶望的になり、その結果、どんな素晴らしい名前をつけようとも、古代ギリシャ人が専制政治と呼んだものに終わるのである。そこでは、ある1人の人物が状況を改善することができると考えられているため、すべての者がその者の自発的な奴隷になっているのである。

だが、ネロの秘書官エパフロディツスの奴隷であったエピクテトスのように（人がこれほど卑しく醜い境遇に置かれることがあるだろうか）、賢い人は真に自由であるための秘訣（すなわち自分自身を除いて、誰にも何にも不満を抱かないこと）を見つけることができるようになるだろう。「ああ、私があればやこれやを持っていれば！」ではなく、「ああ、私があればやこれやであれば！」と言うべきなのである。そして、神の救いにより（その英雄的な奴隷は、異教徒であったにも拘わらず神の救いを信じ、あてにしていた）「神が、私になるべきであり、なることができると示されたものになるだろう。」

年収1万ポンドでも1千万ポンドでも、エピクテトスがよく見ていたように、彼が感じ、克服し、軽蔑してきた状況に対する粗野な不満を解消することはできない。というのも、それは、いつもより多くの休みやお菓子を欲しがる子どもたちが常に抱く不満と同じだからである。しかし、筆者は読者の皆さんに、大人の男性や女性の不満を持ち、それを大切にしてほしいと願っている。

それゆえ、筆者は男性にも女性にも、自らの体格はもとよりその子どもたちの体格に対して神聖で健全な不満を抱かせたいのである。筆者は彼らの目を人類の貴重な遺産である古代ギリシャ人の彫像に、その優しい壮麗さ、貞淑な健康さ、完全であるがゆえの無意識の力強さに慣れさせるだろう。そして、こう言うのだ。ここに、あなたと、未だ生まれざるすべての世代に対して、人がかつてはどのようになりえたのか、もし人が神の声である自然法則に従うならば、再びどのようになりうるのかを示すしるしがあると。筆者は、彼らの住居の不快感と狭さに不満を持たせ、女性は当然のこと、あらゆる階級の男性に彼らの流行の衣服に不満を持たせ、彼らが改善する力を持っている周囲のすべてのものが、少しでも不潔で、不適切で、卑しく、滑稽で、不

健全であるならば、それらに不満を持たせるだろう。筆者は、彼らが教育と呼ぶものに不満を抱かせ、彼らにこう語り掛けたい。「あなた方が教育と呼んでいる読み書き計算は教育ではない。ロイヤル・ソサイエティ・オブ・アーツ⁷やその他の団体が授与する最高の賞を受賞できるような知識も同様である。それらは教育ではなく単なる知識である。つまり教育を実践的に活用するために必要な基礎であり、教育そのものではないのだ。」

もし彼らに「それでは教育とは何か？」と尋ねられれば、私はまず300年前のリリー⁸の手になる『ユーフェイズ』を紹介し、教育について述べている部分、とりわけ今日では教育と奇妙に混同されている単なる知識について述べた以下の一節を検討するよう求める。「人間の本性には、知識と理性という2つの主要かつ特異な才能がある。一方（すなわち理性）は「命じること」であり、他方（すなわち知識）は「従うこと」である。これらのことを、回転する運命の輪が変えることも、俗物の欺瞞的な悪口が引き離すこともできず、病気が軽減することも、年齢が終わらせることもできない。」続いて筆者は、グラッドストーン氏⁹の『英雄たちの世界』の中で、ホメロスの時代のギリシャ人青年の理想的な教育について述べている頁を紹介し、こう述べるだろう。これこそが、たとえ彼が人生で一度も本を見たことがないとしても、真に文明化された人間にふさわしい教育であると。つまり教育とは、尊敬の念を持ちながらも自信を持ち、優雅でありながらも勇敢で、有能でありながらも雄弁な人物になるまで、肉体、精神、心のすべての能力を完全に、比例して、調和のとれた形で引き出すこと、つまり、隠れている才能を引き出し、陶冶することである。

「このことが科学と何の関係があるのか？ホメロスの時代のギリシャ人は科学については何の知識もないのだから」と尋ねられれば、筆者はこう答えるだろう。古代ギリシャ人は科学的本能、教えやすさと謙虚さ、さらには澄んだ目と鋭敏な耳、事実と自然、そして人間の身体と心と精神に対する心からの尊敬、つまり人間本性を地球上の最高の事実としてその完全性を尊重することを、我々が知っているすべての古代民族の中で傑出して持っていた。それゆえ、彼らは後年、旧世界の偉大な植民者、偉大な啓蒙家となっただけでなく、誰も目にしたことの無いような最も実用的な人々であり、あらゆる

健全な形而下学とあらゆる健全な形而上学の父でもあった。彼らの宗教は、その不完全さにも拘わらず、私たちが時に性急に非難する擬人観によって教育を促進した。グラッドストーン氏は、長い引用の一節で次のように述べている。「聖パウロが肉と心、精神と肉体の生活と呼んでいるものに集約されている、神に向かう生活の領域外にある人間の性質の他のすべての機能について、このシステムの意図は美、力、知恵の規範及びそれらすべての組み合わせの規範を提案することで人間の要素を高めることである。それは神性を達成可能なものとし、それによって人間の思考と目的を効果的に導くものであった。

無限の願望の線に沿って

このような宗教の計画は、感情の制御や道徳的な義務の基準を維持することには大きく失敗しているが、高貴な自尊心や、大きくて自由で多様な人間性の概念を生み出すことに力を発揮した。それは、心と体を鍛えるための重要な計画、つまり生涯教育の計画に組み込まれている。そして、このような心と行動の習慣は、(他の多くの偉業は省くとして) 今日まで他の追従を許さない哲学、文学、芸術に顕著な成果をもたらした。」¹⁰

古代ギリシャ人は、科学もキリスト教もなかったにも拘わらず、自身の教育のためにこれほど多くのことを成し遂げた。翻って私たちは科学とキリスト教の両方を手にしている。もし我々の長所と我々自身に忠実であるならば、何をしないでいられるだろうか？

訳注

- 1 底本は「健康の科学」(1) 同様、Charles Kingsley. *Health and Education*. Ohio: Pinnacle Press, 2017 とし、随時 *Health and Education*. NY: D. Appleton, 1874 も参照した。
- 2 国民健康協会 (National Health Society) は、1871 年に Elizabeth Brackwell (1821-1910) によって設立された。同協会は英国における女性医師のパイオニ

- アだった Brackwell の信念に基づき、労働者階級や女性たちに対して無料のセミナーを開講するなど、予防医療の普及に尽力した。
- 3 Elizabeth Macfarlane Chessar (1877-1940) は英国の医師、医療ジャーナリスト。著書に *Perfect Health for Women and Children* (1913) など。
 - 4 Dodson and Fogg は Charles Dickens による長編第 1 作 *The Posthumous Papers of the Pickwick Club* (1837) に登場する弁護士。
 - 5 Sampson Brass は、同じく Dickens による第 4 作 *The Old Curiosity Shop* (1840-41) に登場する極悪非道な弁護士。
 - 6 Montague Tigg (別名 Tigg Montague) は、同じく Dickens による第 6 作 *Martin Chuzzlewit* (1843-44) に登場するペテン師。
 - 7 正式名称は The Royal Society for the Encouragement of Arts, Manufacture and Commerce で、1754 年に設立された学術団体。
 - 8 John Lyly (1554-1606) は英国の小説家、劇作家。ギリシャとイタリアの王子の交流を通じた教訓小説 *Euphues, the Anatomy of Wits* (1578) により名声を高めた。
 - 9 William Ewart Gladstone (1809-98) は英国自由党の政治家で、4 度に渡り首相を務めた。著作に、ホメロスの作品分析である *Juventus Mundi: The Gods and Men of the Heroic Age* (1870) など。
 - 10 Gladstone 376-77 からの引用。

参考文献

- Kingsley, Charles. *Health and Education*. NY: D. Appleton, 1874. Print.
- . *Health and Education*. Ohio: Pinnacle Press, 2017. Print.
- Gladstone, William Ewart. *Juventus Mundi: The Gods and Men of the Heroic Age*. London: Macmillan, 1869. Print.